

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 28 日現在

機関番号：12102

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2014

課題番号：24652008

研究課題名(和文) 慈雲著『法華陀羅尼略解』をめぐる文献学的ならびに密教史学的研究

研究課題名(英文) Philological Research into the Abbreviated Commentary on the Dharanyah in the Saddharmapundarika-sutra written by Zsiun in the Light of History of the Esoteric Buddhism

研究代表者

秋山 学 (AKIYAMA, Manabu)

筑波大学・人文社会系・准教授

研究者番号：80231843

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：慈雲の『法華陀羅尼略解』には唯識学的注記が認められる。彼は『雙龍大和上垂示』において、唯識は八識を説くが、密教では「菴摩羅識」をも説くと述べる。慈雲は、天御中至尊が菴摩羅識に当たるとするが、この尊は高天原の神であり、彼の『神儒偶談』には「高天原虚空觀」が述べられる。「菴摩羅識」は法界体性智に当たるが、『論語』15-42には、孔子が瞽者を敬ったとある。孔子は瞽者を儒教尚古主義の体現者と認識していたが、瞽者は眼識をも欠くため、彼らの生は「菴摩羅識」に基づく。こうして慈雲は、儒教尚古主義と「高天原虚空觀」「法界体性智」に通底する地平、つまり儒・仏・神・密の結節点を『法華陀羅尼略解』に説いたと言える。

研究成果の概要(英文)：The autograph manuscript of the Abbreviated Commentary on the Dharanyah in the Saddharmapundarika-sutra is now in the possession of the Library of Tsukuba University. There is a copy of this Commentary by an anonymous in the possession of Seirai-ji temple at Tsu. In this Commentary, Ziun makes clear his inclination to interpret the sutra from the viewpoint of Vijnana-vadin. Ziun reveals his assent to the reverence of Confucius for the principles transmitted from the ancients in the Casual Conversation between Shintoist and Buddhist. Ziun, on the other hand, reveals his opinion in the Teachings of the Major Abbot of the Hermitage with Two Dragons that the amala-vijnana corresponds to the Takamanohara of Shintoism or the Void of Buddhism. Confucius respects the blinds highly in the Analects (15-42). We could say that the blinds lacking in the eyesight live their life with the amala-vijnana. Thus, we can find a dimension fused among Confucianism, Shintoism and Buddhism in this Commentary.

研究分野：古典古代学

キーワード：慈雲 『法華陀羅尼略解』 『神儒偶談』 菴摩羅識 高天原虚空觀 法界体性智 瞽者 尚古主義

1. 研究開始当初の背景

2010年、筑波大学附属中央図書館に所蔵が確認された、江戸時代中・後期の高僧慈雲尊者飲光(1718 - 1804)の直筆による『法華陀羅尼略解』は、『妙法蓮華經』陀羅尼品第26、および同普賢勸発品第28に収められた「六番神咒」をめぐり、梵本ならびに諸種漢訳を併記し、慈雲自身による句釈を付した著述であり、1803年3月4日校了の日付が遺る慈雲最晩年の直筆著作である。この著作には天台真盛宗の律僧たちへの写本伝播が認められるほか、終生「正法律」を提唱した真言僧慈雲が、晩年『法華經』の注疏を手がけたことを明らかにするものとして重要である。本企画では、この著作をめぐる文献学的調査を推進するとともに、台密と法華經諸儀軌の関係、東密と台密の関わり、慈雲『梵学津梁』中の諸密教文献に関する事相・教相両面からの解明など、包括的な視野を保持しながら、日本密教史の総括的記述を目指すことを企図した。

この『法華陀羅尼略解』に関しては、2010年、筑波大学附属中央図書館の秋季特別展示(10月4日~29日開催「慈雲尊者と悉曇学自筆本『法華陀羅尼略解』と『梵学津梁』の世界」)に際し、この著作が同図書館和装古書コーナーのうちに慈雲の直筆本として所蔵されていることを、本研究の研究代表者秋山学が、その筆跡と梵字サイン、日付等に基づいて明らかにした(朝日新聞2010年9月28日朝刊29面茨城版「慈雲の直筆 筑波大に」、および茨城新聞2010年10月18日朝刊18面「慈雲の新資料発見」を参照)。この写本は、電子検索システムの類、あるいは遡って『国書総目録』等にあつては、著者・筆者に関して「不明」とされていたものであり、成立時期は、それまで慈雲最晩年の著作とされてきた『理趣經講義』(1803年2月24日)よりも約10日遅く、現在知られる限り、慈雲の直筆本としては最も遅い日付を持つものとなった。

この著作をめぐるのは、真言律宗系僧侶である慈雲が、最晩年に天台法華系の「法華經陀羅尼」を扱ったという点で注目に値する。研究代表者による調査により、2011年7月28日、三重県津市の天台真盛宗西来寺経蔵に所蔵されている『法花陀羅尼句解』が、上述の『法華陀羅尼略解』の写本であるということが、『句解』の奥書から判明した。この『句解』は、江戸期の天台真盛宗僧侶で西来寺住持の宗淵(1786 - 1859)が、同じく天台真盛宗僧侶の妙有(1781 - 1854)による『略解』の写本を写させたものであり、この奥書によって初めて、筑波大所蔵本が慈雲の著作であることが客観的に証明された。

2. 研究の目的

本研究は、以上のような準備状況を受け、筑波大所蔵本『法華陀羅尼略解』の写本伝承をさらに明らかにするとともに、この著述に

関して、これが慈雲最晩年のものであること、また天台僧への伝播が認められることに鑑み、『法華經』および台密諸経軌の系譜を辿ることにより、わが国における東密・台密の伝承を有機的かつ総括的に記述することを当初の目的とした。この試みは、代表者による「慈雲尊者と戒律の系譜 筑波大学所蔵・慈雲自筆本『法華陀羅尼略解』を基に」(『文藝言語研究 文藝篇』、第60巻、1 - 26頁、2011年10月)において、戒律史の側面からすでに開始されていたが、本企画はこれをさらに密教史の立場から推進することを目指すものであった。その際、上述の展示会において、筑波大に所蔵される慈雲編『梵学津梁』の諸写本を精査した実績を活かし、悉曇学史のみならず、日本の密教史全体を明らかにすべく、諸経軌とそれらをめぐる解釈の伝承を辿ることが念頭に置かれていた。

また、この図書館展示会に際して刊行された約40頁のカラー図録については、研究代表者自身の手で書評が執筆され、ハンガリーの書評誌 KLIÓ の2012年2月号(2012/1)に掲載された。こうして本研究は、国際的な発信の拡がりをも有し、世界規模で展開されている慈雲研究と密教研究に資することが期待された。なお本企画に関連する研究成果については、2018年、慈雲の生誕300年をめぐり、著作のかたちで公にする予定である。

ところで当初、表題の「文献学的」という表現に関しては、筑波大本から西来寺本への書写の過程(筆記者、筆記日時等)や、筑波大本の東京師範学校(明治6~17年)への搬入の経緯などを明らかにすることを含めていたが、これらは必ずしも本質的な事項ではないということが、次第に認識されるようになった。つまり本研究にあつては、あくまでも慈雲本人に関わる限りで「文献学的」的立場を維持すべきだとの確信が得られるようになったのである。したがって「文献学的」という表現をめぐっては、『略解』が慈雲最晩年の直筆本であることの重視により、『略解』と慈雲による諸作の間に見られる思想的関連性の解明を、新たな目標として設定することになった。

3. 研究の方法

筑波大学附属図書館に所蔵される慈雲著『法華陀羅尼略解』と、

(1)『法華經』に關係する『觀智儀軌』等の密教諸儀軌、あるいは『法華懺法』『魔訶止觀』といった諸書との関連を、文献学的に明らかにする。

(2)天台宗所依の『梵網經』関連の戒本との関連を考究し、慈雲と天台諸宗僧侶たちとの交流の背景を明らかにする。

(3)慈雲晩年の諸著作、すなわち『神儒偶談』『雙龍大和上垂示』『両部曼荼羅隨問記』等の諸作品との思想的連関性を明らかにする。

4. 研究成果

筑波大学附属中央図書館に所蔵される慈雲最晩年の直筆本『法華陀羅尼略解』には、計六陀羅尼より成る「法華陀羅尼」のうち「普賢陀羅尼」への略解の冒頭に「人法二空」「断習気」といった唯識学による注記が認められる。慈雲は、これに先立ち『雙龍大和上垂示』の一篇（1796年2月8日）の中で『成唯識論』に言及し、唯識学は『俱舍論』の六識に加え末那識、阿頼耶識を説いて八識とするが、密教ではさらに第九識たる「菴摩羅識」を説くと述べている。慈雲はこの垂示において、神道の国常立尊は阿頼耶識に、天御中主尊は菴摩羅識に当たると理解するが、『古事記』によれば、天之御中主尊は高天原に成った神である。一方慈雲80代の著書『神儒偶談』には、神道における高天原が、仏道にあって持戒の場とされる虚空に相当するという「高天原虚空観」が繰り返し述べられている。密教において「菴摩羅識」は、金剛界五仏のうち中央の大日如来に、また五智のうち究極の「法界体性智」に対応するが、これは「自性清浄心」と換言できる。一方『論語』衛霊公篇第15-42他には、孔子が「瞽者」つまり盲目の「冕」に対し、最高の敬意をもって接したことが記されているが、これは彼が、瞽者のうちに留められている「道統」を最大限に尊んだことを意味するものである。つまり孔子は、瞽者こそ儒教の原点たる「尚古主義」の体现者であると認識していた。瞽者は、前五識の筆頭たる眼識をも欠くものの、それだけに彼らの地上での生は、言わば「菴摩羅識」に基づくものだと理解できる。慈雲は、戒律宣布と法華三大部請来の功のゆえに、鑑真への崇敬において篤いものがあつたが、来日した晩年の鑑真も瞽者であったことが想起される。おそらく慈雲は、儒教における尚古主義のうちに、このように神道・仏教に通じる「高天原虚空観」との、また密教における「法界体性智」との共通性を見出していた。こうしてわれわれは、慈雲最晩年の著書『法華陀羅尼略解』のうちに、儒・仏・神・密教の交差する地平を見ることが出来る。

なお本企画を遂行する過程で、研究代表者が専門領域とする比較宗教思想研究および古代キリスト教文献学の分野において、いくつかの成果が得られた。その主なものについては下記〔雑誌論文〕その他に挙げたとおりであるが、特に、キリスト教作家の中で最も早く「ブッダ」の名を著作中に遺した人物として記憶される初期ギリシア教父・アレクサンドリアのクレメンス(150-215)による主著『ストロマテイス』に関して、補遺に相当する第8巻をも含め、本邦初訳が本企画期間中に研究代表者の手で完遂された。また慈雲のヴィジョンから示唆を得て、十字架上のキリスト、神道における高天原、儒教において瞽者が体现する尚古主義、仏教における授戒の場としての虚空、そして密教における法界体性智＝菴摩羅識の成立する場がすべて、

この地上ではなく、地上から隔たった「宙」に置かれることを根拠に、キリスト教神学の諸国際学会において、特に『ヨハネ福音書』をめくり、研究代表者による独創的な発表が行われ得たことを付記しておきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計23件)

- 1) 秋山 学、「慈雲尊者による儒教理解 『神儒偶談』『法華陀羅尼略解』『雙龍大和上垂示』を手がかりに」、『古典古代学』第7号、39-66頁、2015年3月。単著。「審査付」。
- 2) 秋山 学、「陣中旗の神学 真理と十字架」、『地域研究』36号、91-105頁。2015年3月。単著。審査付。
- 3) 秋山 学、「ビザンティンの修道士教育 聖バジルのテキストをもとに」、『文藝言語研究 言語篇』第67巻、121-142頁、2015年3月。単著。「審査付」。
- 4) 秋山 学、「アレクサンドリアのクレメンス『救われる富者とは誰であるか』全訳【改訂版】」、『文藝言語研究 文藝篇』第67巻、51-87頁、2015年3月。単著。「審査付」。
- 5) 秋山 学、「アレクサンドリアのクレメンス『ストロマテイス』(『綴織』)第5巻全訳【改訂版】」、『文藝言語研究 言語篇』第66巻、57-148頁、2014年10月。単著。「審査付」。
- 6) 秋山 学、「アレクサンドリアのクレメンス『ストロマテイス』(『綴織』)第8巻全訳」、『文藝言語研究 文藝篇』第66巻、87-115頁、2014年10月。「審査付」。
- 7) 秋山 学 (書評) SZÉCSI József (szerk.), Keresztény - Zsidó Teológiai Évkönyv 2012, Keresztény - Zsidó Társaság, Budapest 2013, pp. 446, ISSN 1785-9581, A/5, 『中世思想研究』LVI, 133-138頁、2014年9月、単著。「審査無」。
- 8) 秋山 学、「ラテン語とフランス語 古典作品を素材に (1)-(12)」、『ふらんす』2014年4月号、74-75頁；同2014年5月号、42-43頁；同2014年6月号、42-43頁；同2014年7月号、42-43頁；同2014年8月号、42-43頁；同2014年9月号、42-43頁；同2014年10月号、42-43頁；同2014年11月号、42-43頁；同2014年12月号、42-43頁；同2015年1月号、42-43頁；同2015年2月号、42-43頁；同2015年3月号、42-43頁；白水社、2014年4月-2015年3月。単著。「審査無」。
- 9) 秋山 学、「アレクサンドリアのクレメンス『ストロマテイス』(『綴織』)第4巻全訳」、『文藝言語研究 文藝篇』第65巻、77-158頁、2014年3月。単著。「審査付」。
- 10) 秋山 学、「アレクサンドリアのクレメンス『ストロマテイス』(『綴織』)第6巻

全訳」、『文藝言語研究 言語篇』第 65 巻，41 - 136 頁，2014 年 3 月．単著．「審査付」．

11) 秋山 学，「アレクサンドリアのクレメンズ『ストロマテイス』(『綴織』) 第 7 巻全訳」、『古典古代学』第 6 号，35 - 113 頁，2014 年 3 月．単著．「審査付」．

12) 秋山 学，「言葉による「証し」 『ヨハネ黙示録』の射程」、『地域研究』35 号，37 - 57 頁，2014 年 3 月．単著．「審査付」．

13) 秋山 学，「菩薩戒と『摩訶止観』 慈雲と天台思想の関係をめぐって」、『文藝言語研究 文藝篇』第 64 巻，1 - 26 頁，2013 年 10 月．単著．「審査付」．

14) 秋山 学，「『古典古代学』開題 学の円頓性を求めて」、『文藝言語研究 言語篇』第 64 巻，1 - 21 頁，2013 年 10 月．単著．「審査付」．

15) 秋山 学，(書評)「Krántz Mihály, Órigenész: A hit nagy mestere, Catena monográfiák 10, A/5, 3000 Ft., Budapest: Kairosz Kiadó, 2008, pp.276, ISBN 978-963-662-030-1」、『中世思想研究』LV，126 - 130 頁，2013 年 9 月，単著．「審査無」．

16) 秋山 学，「アレクサンドリアのクレメンズ『ストロマテイス』(『綴織』) 第 1 巻全訳」、『文藝言語研究 文藝篇』第 63 巻，63 - 163 頁，2013 年 3 月．単著．「審査付」．

17) 秋山 学，「アレクサンドリアのクレメンズ『ストロマテイス』(『綴織』) 第 2 巻全訳」、『文藝言語研究 言語篇』第 63 巻，147 - 223 頁，2013 年 3 月．単著．「審査付」．

18) 秋山 学，「アレクサンドリアのクレメンズ『ストロマテイス』(『綴織』) 第 3 巻全訳」、『古典古代学』第 5 号，27 - 93 頁，2013 年 3 月．単著．「審査付」．

19) 秋山 学，「古典古代学と聖書学 『ヨハネ福音書』と共観福音書」、『地域研究』34 号，65 - 86 頁，2013 年 3 月．単著．「審査付」．

20) 秋山 学，「慈雲と天台僧たち 『法華陀羅尼略解』の位置づけをめぐって」、『文藝言語研究 文藝篇』第 62 巻，1 - 41 頁，2012 年 10 月．単著．「審査付」．

21) 秋山 学，「十字架と三位一体 モーセ像をめぐる解釈を中心に」、『文藝言語研究 言語篇』第 62 巻，1 - 19 頁，2012 年 10 月．単著．「審査付」．

22) 秋山 学 (書評)「Heidl György, Érintés: Szó és kép a korai keresztény misztikában, Catena monográfiák 14, A/5, 2500 Ft., Budapest: Kairosz Kiadó, 2011, pp.240, ISBN 978-963-662-096-7」、『中世思想研究』LIV，152 - 155 頁，2012 年 9 月，単著．「審査無」．

23) 秋山 学，(書評)「出村みや子『聖書解釈者オリゲネスとアレクサンドリア文献学 復活論争を中心として』(知泉書館，2011 年，viii + 292 頁)」、『宗教研究』第 86 巻 372 号第 1 輯，131 - 136 頁，2012 年 6 月，単著．「審査無」．

〔学会発表〕(計 7 件)

- 1) AKIYAMA Manabu, „Üldözés alatt élő japán keresztények (17. század elején) és az ő tanításuk”，Pázmány Péter Katolikus Egyetem, Budapest, Hungary, 2014.09.23.
- 2) Manabu AKIYAMA, “La caratteristica escatologica del Cantico dei cantici secondo Gregorio di Nissa”，XIII International Colloquium on Gregory of Nyssa (“Gregory of Nyssa’s In Canticum”，Pontifical University of the Holy Cross, 2014.09.17-20), Rome, Italy, 2014.09.20.
- 3) Manabu AKIYAMA, “Il significato di “segno” nell’interpretazione biblica di Clemente Alessandrino”，Colloquium Clementinum Secundum (“Biblical exegesis in Clemens”，Univerzita Palackého v Olomouci, 2014.05.29-31), Olomouc, Czech, 2014.05.30.
- 4) Manabu AKIYAMA, “Il significato misterioso della profezia nelle Omelie su Ezechiele di Gregorio Magno”，Colloquium Origenianum Undecimum (“Origen and Origenism in the History of Western Thought”，Aarhus Universitet, 2013.08.26-30), Aarhus, Denmark, 2013.08.30.
- 5) AKIYAMA Manabu, „»Örökség« a mennyei Jeruzsálemben (Jel 21,7)”，XXV. Biblikus konferencia („A Biblia és a gazdaság”，Gál Ferenc Hittudományi Főiskola, 2013.08.22-24), Szeged, Hungary, 2013.08.22.
- 6) AKIYAMA Manabu, „A püspökség és a Szentírás értelmezése Nagy Szent Gergely műveiben”，A Magyar Patrisztikai Társaság XIII. országos konferenciája („Vallás és hatalom az egyházatyák korában”，Szent Atanáz Görög Katolikus Hittudományi Főiskola, 2013.06.27-29), Nyíregyháza, Hungary, 2013.06.29.
- 7) AKIYAMA Manabu, „Istennek a világ iránti szeretete János Evangéliumában: a bizánci teológia tükrében”，XXIV. Biblikus konferencia („Jézustól Krisztusig”，Gál Ferenc Hittudományi Főiskola, 2012.08.21-23), Szeged, Hungary, 2012.08.22.

〔図書〕(計 8 件)

- 1) AKIYAMA Manabu, D. Tóth Judit és Heidl György (ed.), STUDIA PATRUM 5: Irodalom, Teológia, Művészet, Szent István Társulat, 2014; 分担: „Nagy Szent Bazil liturgiája és a „mindenség megújulása””，pp. 109-120. 単著.
- 2) AKIYAMA Manabu, D. Tóth Judit és Heidl György (ed.), STUDIA PATRUM 5: Irodalom, Teológia, Művészet, Szent István

Társulat, 2014; 分担 : „Nagy Szent Bazil a keresztség szentségéről ” , pp. 121-130. 单著.

3) 吉森 佳奈子, 小山利彦編 『王朝文学を彩る軌跡』(武蔵野書院), 2014年; 分担 : 「注釈史のなかの『河海抄』 『首書源氏物語』をめぐって 」, 217 - 230 頁 . 单著 .

4) Manabu AKIYAMA, György Benyik (ed.), The Bible and Economics, International Biblical Conference XXV. 22nd -24th August 2013, JATE Press, 2014; 分担 : “ L ’ «eredità» nella Gerusalemme celeste (Ap 21,7) ” , pp.37-46. 单著.

5) 秋山 学, 第 2 バチカン公会議文書公式訳改訂特別委員会監訳 『第二バチカン公会議公文書 改訂公式訳』, カトリック中央協議会, 2013 年 ; 分担 : 「『カトリック東方諸教会に関する教令』解説」, 742 - 761 頁 . 单著 .

6) AKIYAMA Manabu, Benyik György (ed.), „Jézustól Krisztusig ” : 24. Nemzetközi Biblikus Konferencia 2012. augusztus 21-23., JATE Press, 2013; 分担 : „Istennek a világ iránti szeretete János Evangéliumában: a bizánci teológia tükrében ” , pp.29 - 40 . 单著 .

7) 吉森 佳奈子, 日向一雅編 『源氏物語の礎』(青簡舎), 2012年; 分担 : 「字書の出典となる『河海抄』」, 270 - 289 頁 . 单著 .

8) AKIYAMA Manabu, Benyik György (ed.), Isteni bölcsesség emberi tapasztalat: 23. Nemzetközi Biblikus Konferencia 2011. szeptember 8 - 10., JATE Press, 2012; 分担 : „A Bölcsesség működése a Sirák fiának könyvében ” , pp.51 - 58 . 单著 .

6 . 研究組織

(1) 研究代表者 秋山 学 (AKIYAMA , Manabu)

筑波大学・人文社会系・准教授

研究者番号 : 80231843

(2) 研究分担者 秋山 (吉森) 佳奈子 (AKIYAMA-YOSHIMORI , Kanako)

筑波大学・人文社会系・准教授

研究者番号 : 10302829